

2 鑄物のまち^{かなや}金屋に見る歴史的風致

(1) はじめに

高岡の鑄物は、^{としなが}利長が城下の建設にあたって、^{となみごおりにしぶかなやむら}砺波郡西部金屋村（現在の高岡市戸出西部金屋）の鑄物師に高岡へ移住して仕事をするように指示を出し、^{かなや}金屋の地を与え、税や諸役の免除など手厚い保護をしたことに始まるとされる。^{かなや}金屋の地については、以下の『^{かなやちようはいりようちえず}金屋町拝領地絵図（享保13年（1728）高森家文書）』から見ることができる。



金屋町拝領地絵図（享保13年（1728）高森家文書）高岡市立博物館寄託
※右側半分の薄墨色部分が拝領地

銅器の一大生産地として発展した高岡は、^{かなや}金屋町を中心に固有の歴史的風致を形成している。高岡銅器の象徴が*高岡大仏であり、鑄造から着色までの全工程を高岡で行ったものとして、全国的にも珍しいものである。



高岡大仏



高岡大仏開眼供養会（昭和8年（1933））

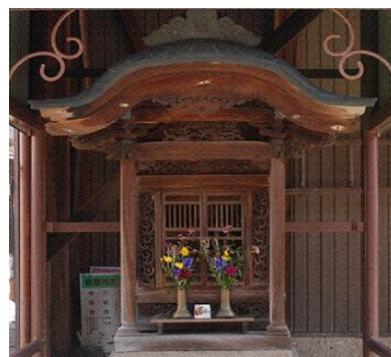
※ 高岡大仏…市指定有形文化財であり、指定名称は^{どうぞうあみだによらいざぞう}銅造阿彌陀如来坐像。

高岡鑄物発祥の地である^{かなやまち}金屋町は、狭い間口と深い奥行の敷地に軒を連ねる形式で、その敷地配置は基本的な構成である主屋、中庭、土蔵、作業場が残る町家によって歴史的な景観が形成されている。また、サマノコと呼ばれる格子を建て込んだ町家も多く残る。^{かなやまち}金屋町の伝統的な町家は、多くが明治期から大正期にかけて建てられたもので、一般的に切妻造り・平入り・2階建て・真壁造り建物で、大きな特徴として両袖の袖壁や軒の深さなどが挙げられる。特に、明治期に建てられた古いものは、冬期間の積雪に耐えられるよう登り梁形式となっており、階高の低い2階は物置として使用されていた。

鑄物を^{なりわい}生業とすることから常に防火に気を配っていたことは、^{かなやまち}金屋町が高岡のまちの中心部からやや離れた^{せんぼがわ}千保川の対岸に配置されたことに象徴されるが、防火の意識は町家の平面形式にも見ることができる。各町家は、主屋、中庭、土蔵、作業場と順に配しており、火災の可能性の高い作業場を奥に置き、さらに万一の際には土蔵の開口部を味噌で目張りし主屋への延焼を防げるようになっている。また、^{かなやまち}金屋町には道路脇や各家の蔵前などに数多くの^{ほくら}祠がある。道路脇のものは、早くに亡くなった子供など家族の供養をするためのもので、蔵の前などに置かれたものは、鑄物作業で火を扱うことから、火除けの意味で置かれたものである。



金屋町の町並み



祠

（2）歴史的風致を形成する建造物等

（鑄物づくりに関連）

①金屋町伝統的建造物群保存地区

利長は、鑄物師に高岡城の外側にあたる千保川西岸へ移住して仕事をするように指示を出した。金屋町は、東西 50 間、南北 100 間の拝領地を中心として成立しており、保存地区中央を南北に金屋町通りが縦断し、江戸期から昭和初期までに建てられた町家が密度高く残る。

敷地は短冊系で、道路に面して主屋を建て、主屋背面の中庭を挟んで土蔵が建ち、さらにその背後に作業場が置かれる。主屋は真壁造りとして、切妻造り平入りで棧瓦葺を基本とし、蔵は土蔵造り、2階建てを基本とする。作業場で火災が発生した際に主屋への延焼を防ぐための工夫とされ、火を扱う鑄物業の職人町＝鑄物師町として意匠的に優れた外観や質の高い造作を持つ町家と鑄物製造に関わる作業場や土蔵などがともに良く残り、特色ある歴史的風致を良く伝えている。



金屋町の町並み

①-1 鑄物工房利三郎

『金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書（平成 23 年（2011））』によると、主屋は昭和 10 年（1935）以前、作業場は明治 10 年（1877）、店舗は昭和 46 年（1971）に建てられた建造物である。構造は、木造家屋、土蔵造りの平屋である。現在も伝統的な技法で鑄物づくりを行っており、作業場では、型づくりや鑄造、仕上げなどの工程が行われている。



鑄物工房利三郎

②有儀正八幡宮

有儀正八幡宮は、本殿・釣殿・拝殿・幣殿からなる明治 16 年（1883）建造の建物で、拝殿・幣殿の八棟造りの屋根の形式や、本殿の入母屋造りの屋根形式、組物の装飾などに特徴がみられ、平成 18 年（2006）に国の登録有形文化財となっている。



有儀正八幡宮

③ 旧南部 鑄造所 (キュポラ・煙突)

旧南部 鑄造所(キュポラ・煙突)は、平成13年(2001)に国の登録有形文化財に登録された。旧南部 鑄造所のキュポラは、鉄製キュポラ及び煙突よりなる。鑄物づくりの工程の一つである鑄造の際に地金を溶解するために建てられたものである。



旧南部鑄造所
(キュポラ・煙突)

④ 立川家

『金屋町・内免伝統的建造物群保存対策調査報告書』によると、主屋は19世紀前期、作業場は明治初期に建てられたとされ、その後、昭和38年(1963)に増築された建造物である。金屋町も含めて周囲で唯一の石置き屋根を残す町家で、古くから鑄物づくりの最後の工程である着色を営んできた家である。



立川家

(御印祭に関連)

① 金屋町伝統的建造物群保存地区 (再掲)

86 ページを参照されたい。(鑄物のまち金屋に見る歴史的風致)

①-1 鑄物工房利三郎 (再掲)

86 ページを参照されたい。(鑄物のまち金屋に見る歴史的風致)

② 有儀正八幡宮 (再掲)

86 ページを参照されたい。(鑄物のまち金屋に見る歴史的風致)

③ 旧南部 鑄造所 (キュポラ・煙突) (再掲)

上記を参照されたい。(鑄物のまち金屋に見る歴史的風致)

④ 立川家 (再掲)

上記を参照されたい。(鑄物のまち金屋に見る歴史的風致)

⑤ 金作家住宅

金屋町伝統的建造物群保存地区中央を南北に縦断する金屋町通りの西側、内免一丁目の中程に位置し、主屋及び東土蔵と西土蔵を有する。主屋は明治26年(1893)、東土蔵は明治28年(1895)、西土蔵は明治末期又は大正時代との推察であることが登録有形文化財の調書に残っている。

このことを踏まえて平成28年(2016)に国の登録有形文化財に登録された。筭が乗った厚板葺きの下屋庇を有する主屋や、中庭を有して土蔵を配する位置関係など、当地域の町家の典型的な姿である。



金作家住宅

（3）歴史的風致を形成する活動

① 鋳物づくり

高岡鋳物の製作技法は、伝統的な技法である双型鋳造法や焼型鋳造法、一品製作に用いられるろう型鋳造法、明治期以降の近代に開発された生型鋳造法など様々な手法があるが、その製作に係る流れは、大別すると製図、型作り、鋳造、仕上げ、着色に分類できる。

i) 製図

製図は、鋳物を作り始める前に行われる製作物のデザイン作業である。日用品であれば使いやすさ、装飾品などであれば美しさなどが重視され、発注者がいる場合にはその意向が確実に反映されるよう、墨や筆を用いて詳細な図案が描かれる。

ii) 型作り

デザイン終了後行われるのが型作りである。木や鉄などを用いた原型を作り、原型を土や砂にうつしとって鋳型が作られる。鋳型が作られた後、鋳造が行われる。

iii) 鋳造

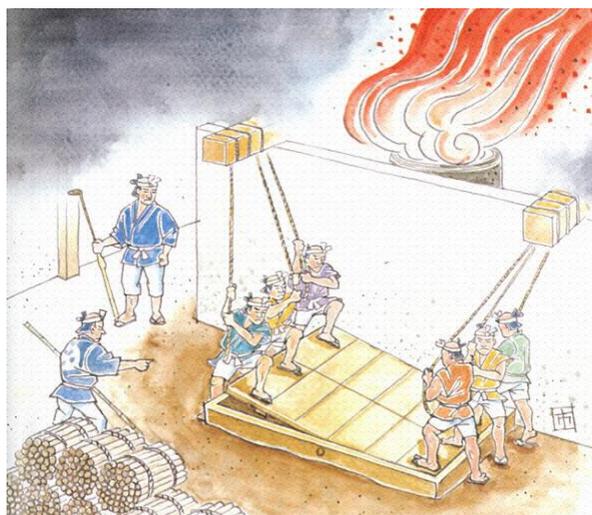
鋳造は、金属を溶かす溶解と、溶かした金属を鋳型に流し込む^{ちゅうとう}注湯からなる。溶解は、主に明治20年（1887）以前は、送風板を踏んで風を送る“たたら”や、仏具や手あぶりなどの小型銅器の鋳造に用いられた^{ふいご}鞴が用いられ、技術や設備の近代化の中で生まれた蒸気機関を動力とする炉などが用いられた。



たたら



鞴



たたら吹作業の図

（『たかおか—歴史との出会い—』平成3年（1991）より）

iv) 仕上げ

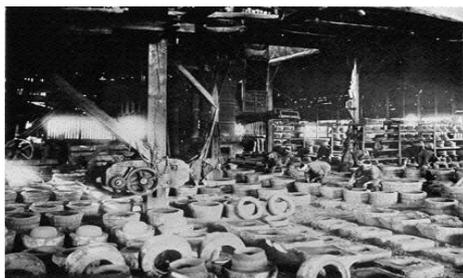
仕上げは、鑄造により作られた鑄物生地を仕上げる作業で、研磨と彫金ちようきんに分かれる。研磨は鑄物表面を磨き上げるものでヤスリや剪せんを用いてきれいに磨かれる。彫金ちようきんは鑄物の表面を鑿たがねで彫ったり叩いたりして模様を作り出す技法である。一般的に、彫金ちようきんは金属の素地に施されることが主であり、高岡でも江戸時代の末までは板金ばんきんに施されていたが、鑄物技術の発達と併せて、次第に鑄物へも彫金ちようきんが施されるようになった。この高岡の彫金ちようきん技法は加賀象嵌ぞうがんの影響を大きく受けているが、日用品など大量生産品の加工を行っていた高岡では独自の技術も多く生み出され、線象嵌せんぞうがんや平象嵌ひらぞうがん、布目象嵌ぬのめぞうがんなど様々な技術が生み出された。

v) 着色

最後の工程が着色である。着色は錆を防ぎ、美しく見せるため、鑄物の表面に色や模様を施す作業である。高岡においては、明治30年（1897）頃から鑄物生産工程から独立して行われるようになった。着色技法は、大別すると漆塗りなどの物理的方法と、加熱や薬品漬けなどの化学的方法、これらを混合する方法の三種がある。

今日、鑄物の生産は、大量生産に併せて郊外の大規模工場で一括して行われることが多くなったが、戦後しばらくは問屋が個々の職人に注文して商品を製造させる問屋制手工業体制が採られていた。この流れを受け、現在でも金屋町かなやまちでは、昔ながらの職人が民家裏の作業場などで鑄造や着色などの作業を行っている。

鑄物工房利三郎いものこうぼう りさぶろうは、現在も伝統的な技法で鑄物づくりを行っている店である。作業場では、型づくりや鑄造、仕上げなどの工程が行われており、作業場の煙突からは煙があがり、あたりには独特の匂いがする。また、金属の溶解の様子や鑄型に金属を流し込む作業などを実際に見て、高岡鑄物の歴史に触れることができる。また、立川家たちかわは、古くから着色を営んできた家である。同家の主屋は、金屋町かなやまちも含めて周囲で唯一の石置き屋根を残す町家で、間取りや内部の意匠から、明治初期には建てられたとされる。旧南部鑄造所きゆうなんぶ ちゆうぞうじょ（キュポラ・煙突）は、金屋町北端にほど近い場所にあり、地金を溶解するために建てられ、鑄物生産の近代化の過程で残されたレンガ積みの建造物である。また、『富山県写真帖（明治42年（1909））』の説明文に、「高岡市金屋町かなやまちに喜多万右衛門の工場にして鉄瓶、鍋、火鉢等年額五万円を製造す」とあることから古くからこの地で鑄物づくりは盛んに行われてきたことがわかる。



喜多鑄物工場（『富山県写真帖』富山県編（明治42年（1909））より）

焼型法とその特徴

焼型鑄造法 【やまがたちろうぞうほう】

■ 焼型鑄造法工程





1 原型
鑄型を分割するための位置に線を入れる



2 外型作り
寄せ型（複雑な部分は鑄型を分割する）を作る



3 外型作り
紙の繊維の入った細かい土を鑄型に薄くつけた後、粗い土をつける



4 鑄型の補強
湯の圧力で鑄型が壊れないよう鉄筋を入れる



5 分割された鑄型
寄せ型を組み立て、二つ割りの鑄型にする



6 うら土張り
製品の肉厚と同じ厚さに粘土を伸ばし、外型の内側に張りつける



7 中子（中型）作り
中子砂をつめ、乾燥させる



8 型合わせ
半分ずつ作った中子を合わせ、一つの中子にする



9 中子（中型）の完成
うら土を取り除くと、原型より一回り小さい中子ができる



10 鑄型の組み立て
外型に中子をおさめ、鑄型を組み立て、針金で補強して溝口をつける



11 焼成
精密な鑄物を作るために、鑄型を850～900℃で7～8時間焼成する



12 注湯
まだ熱い鑄型に、溶かした銅合金を溝口から注ぎ込む



13 型ばらし
すっかり冷えた後、鑄型を割って製品を取り出す



14 仕上げ
鑿や鏡で鑄肌を磨り、原型と同じ表情をつける



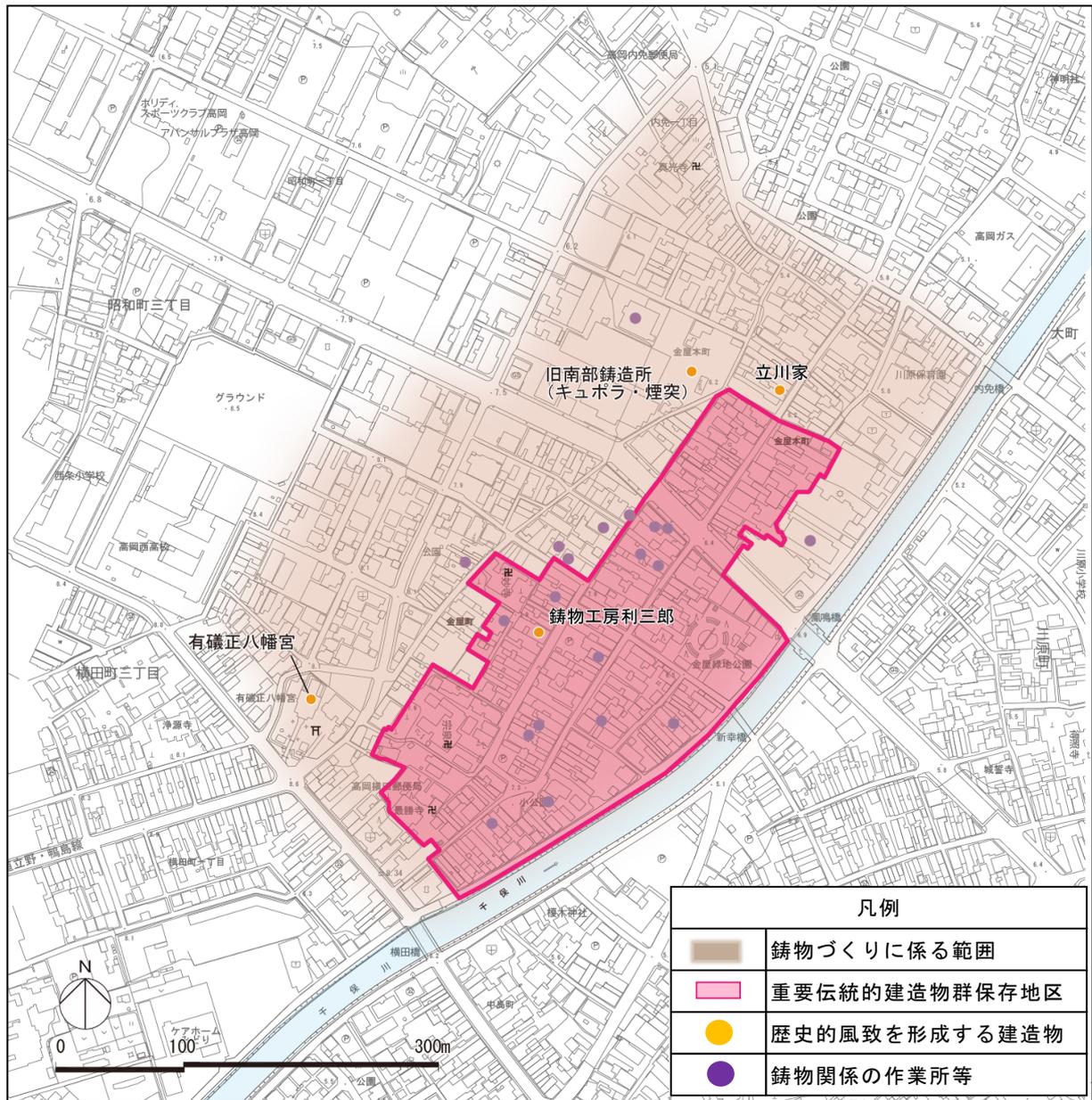
15 着色（煮色）
硫酸銅、緑青の伝統的な着色液に浸し、煮込む



16 「聖観音像」完成
完成品

焼型鑄造法工程

（高岡市教育委員会 ものづくり・デザイン科学習資料「鑄造法と製作工程」を一部加工）



図：鑄物づくりに係る範囲

②御印祭

利長の命日にあたる日に毎年行われる御印祭では、弥栄節を歌い踊りながら町中を練り歩く。これは、利長に対する報恩感謝の念を表して催されるもので、利長没後まもなく始められた。『高岡鑄物史話（昭和29年（1954））』には、嘉永7年（1854）に鑄物師伝来の“御印”類を高岡町奉行の検分に供した際の目録の覚えが採録されている。伝来では、当初は利長の親書、絵像を礼拝していたともいうが、現在は有儀正八幡宮から金屋町公民館内に設けられた祭壇に祭神を招き、式典が執行されている。



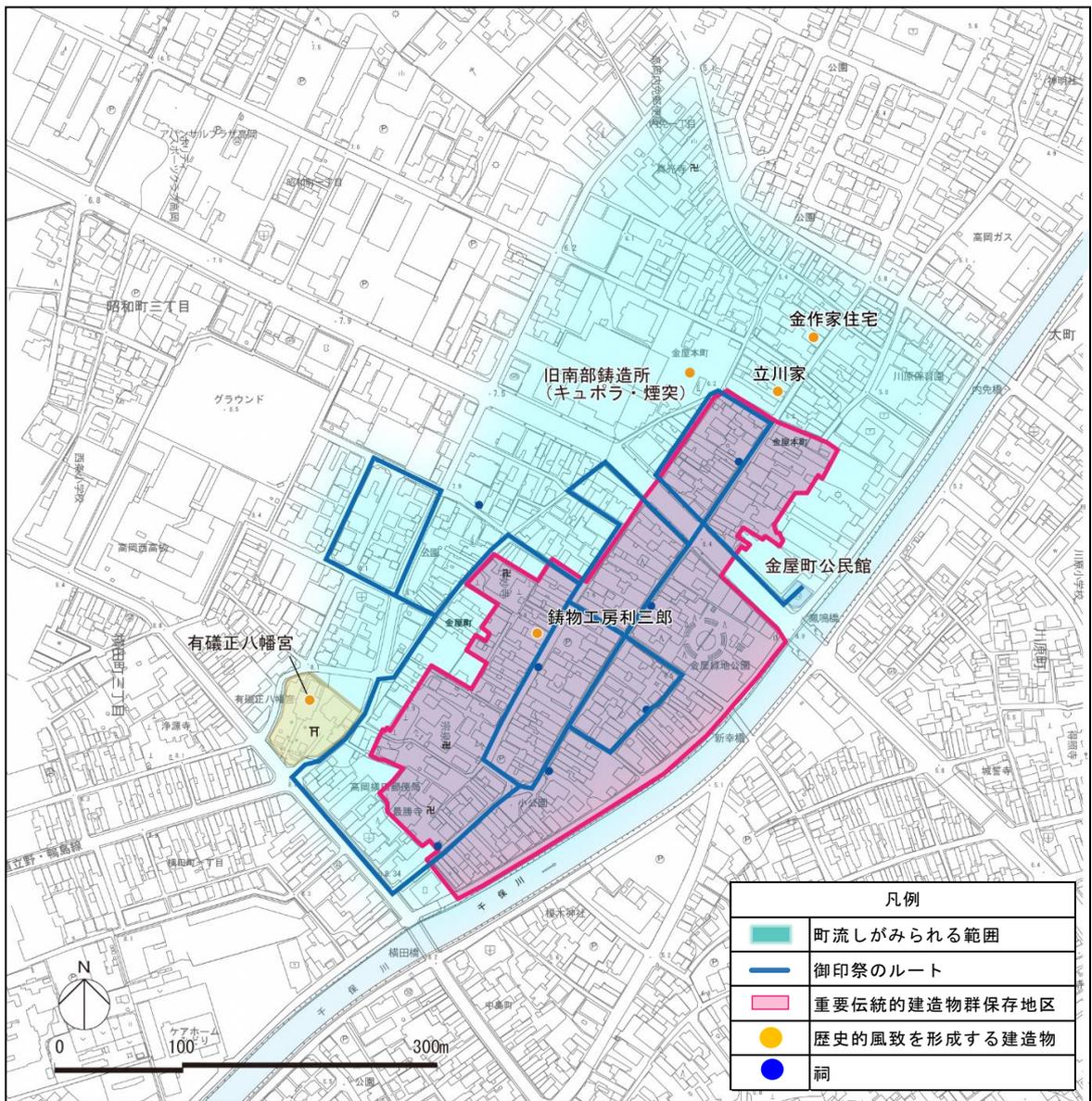
御印祭

祭礼前日には、まず前夜祭として有儀正八幡宮から御神体が金屋町公民館に移される。祭礼当日は、千保川沿いに立つ高岡銅器発祥の地の碑の前に集合した後、行列がスタートし、鑄物工房利三郎や旧南部鑄造所（キュポラ・煙突）など町中を練り歩く。この練り歩きの際に歌われるのが弥栄節である。弥栄節は、鉄を溶かすために溶解炉へたたら板を踏んで風を送る作業が重労働であったことから、気を紛らわせるために歌われ始めたと言われる作業歌である。弥栄節は明治末期になりたたらが使われなくなると一時歌われなくなったが、大正末期から昭和初期にかけて民謡として復興した。また、戦時中にも一端途切れたことがあったが、昭和25年（1950）に高岡弥栄節普及会が組織され復興された。その後、昭和32年（1957）には民謡の研究者らにより音節を整え新しく振り付けが行われ現在の弥栄節が誕生した。その一句には次のようにある。

エンヤシャ	ヤッシャイ	河内丹南	鑄物の起こり	ヤガエフ
今じゃ高岡	金屋町 エー	ヤガエフ	エンヤシャ	ヤッシャイ
今じゃ高岡	金屋町 エー	エンヤシャ	ヤッシャイ	

たたらを踏む際の掛け声が韻よく刻まれる中に、金屋町の鑄物の起源や、重労働の中でも自分たちの行う作業に誇りを持つ心が感じられ、立川家や金作家住宅を含む金屋町地区において歌い継がれている。

なお、御印祭で弥栄節が踊られるようになったのは、昭和27年（1952）の同祭からで、地元の青年らが弥栄節を歌いながら踊ったのが始まりである。以来地元ではこれを後世へ継承すべく、昭和50年（1975）には高岡弥栄節保存会が結成され、伝承のための様々な取組がなされている。



図：御印祭に係る範囲

(4) まとめ

金屋町では、現在でもいものこうぼうり さぶろう たちかわけ 鑄物工房利三郎や立川家をはじめとし、伝統的な技法で鑄物づくりが行われている。作業場では、型作り鑄造、仕上がりなどの工程が行われ、作業場の煙突からは煙が上がり、周辺では独特のにおいが感じられる。また、鑄物づくりの工程の一つである鑄造で使用されたきゅうなん ぶちゅうぞうじょ 旧南部鑄造所（キュポラ・煙突）が今も残されている。

御印祭では、前夜祭で御神体があり そししょうはちまんぐう 有礮正八幡宮からかなやまち 金屋町公民館へ移され、当日にいものこうぼうり さぶろう きゅうなん ぶちゅうぞうじょ 鑄物工房利三郎や旧南部鑄造所（キュポラ・煙突）など町中を練り歩く際には、かつて重労働であったとされるたたら吹作業の作業歌であるやがえふ かなさくけじゅうたく 弥栄節が金作家住宅を含むかなやまち 金屋町地区らの人々によって歌われる。

鑄物づくりや御印祭などを通して、かなやまち 金屋町伝統的建造物群保存地区を中心とするかなやまち 金屋町の風景や音、匂いなどから鑄物のまちの風情が感じられ、固有の歴史的風致が形成されている。

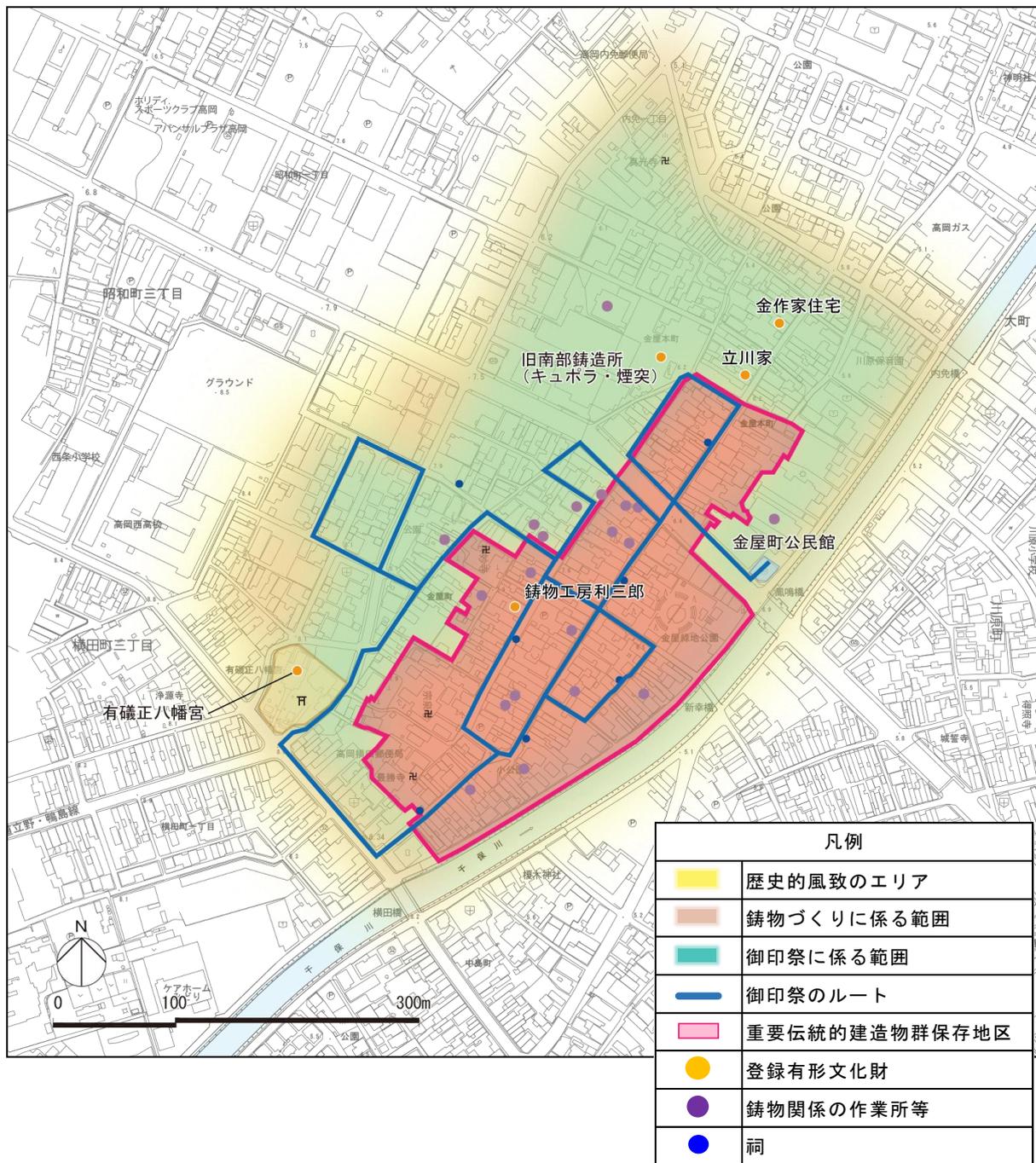
なお、昭和8年（1933）にはよさのひろし あきこ かなや 与謝野寛と晶子が金屋を訪れているが、その際に次のような歌を詠んでいる。彼らもまた鑄物のまちの生み出す独特の風情に大きく心を揺り動かされたのだろう。

高岡の町の金工たのしめり 詩の如くにも鑿の音をたつ（寛）

鑄物師よ楽しかるべきみずからを 釜一つにも試さんとする（寛）

われ入りて鍋作りする炉にあるを 夕日と思う広き金屋に（晶子）

工匠が黒部の川を思わせて 銀の筋置くかねの鉢かな（晶子）



図：鑄物のまち金屋に見る歴史的風致